廣松渉、新カント派、ルーマンを潜り抜けた「情報的世界観」と価値論の展相

大黒岳彦『ヴァーチャル社会の〈哲学〉――ビットコイン・VR・ポストトゥルース――』二〇一八年

渡辺　恭彦

今般の疫病禍により、労働環境や産業の社会的な編制が抜本的に組み替えられつつある。オンラインを介した労務や教育が有力な選択肢の一つとなったことで、対面からオンラインへの移行は今後も継続すると推測される。ほんの数年前まで、誰がこのような危機的事態を予想しえただろうか。

大黒岳彦『ヴァーチャル社会の〈哲学〉――ビットコイン・VR・ポストトゥルース』（青土社、四三三頁）が出版されたのは二〇一八年である。本書でオンライン上の相互行為論が緻密に論じられていることは、理論的な考察が時勢を越えるものであることを示している。今こそ、現状追随的に分析したものではない本書の知見に学ぶときである。

本書は「社会において抑も〈価値〉は如何にして可能か？」という主題に貫かれている。これは、廣松渉研究に従事してきた評者にとって、問題意識において響くところがあった。はじめに掲げられている「情報社会における文化哲学の試み」という主題には、著者の師である廣松を引き継ぐ意図があると拝察される。廣松の主著『存在と意味』は第一巻「認識的世界」、第二巻「実践的世界」が刊行され、文化哲学の展開が構想されていた第三巻は未完となった。著者の情報社会論は、廣松が『世界の共同主観的存在構造』（一九七二）や『物象化論の構図』（一九八三）で予示していた情報的世界観や『存在と意味』の未完部分を継承するものと位置づけられよう。

大黒氏は、哲学者廣松渉の薫陶を受け、新カント派研究に従事した哲学研究者である。一九八九年には、新カント派をめぐって廣松との対談にも臨んでいる。その後、一〇年ほどNHKディレクターとして放送業界に身を置いたのち、学問の世界へと舞い戻った。その際、著者が新たに専門としたのが情報社会論である。ルーマン理論に基づいて情報社会を分析した博士論文は、『〈メディア〉の哲学――ルーマン社会システム論の射程と限界』（二〇〇六）として

[Article]
Yasuhiko Watanabe
The form of development of the “informational world view” and the theory of the value through the philosophy of Hiromatsu Wataru, Neo-Kantian and Luhmann
(Received 31 January 2022)
A Noon of Liberal Arts, No. 11, 2022

刊行された。技術や文化現象を思想史的・歴史的に解明することを試みた『「情報社会」とは何か？――〈メディア〉論への前哨』（二〇一〇）では、テレビ、写真、映画、新聞などのメディアが洋の東西を問わず分析の俎上に載せられた。同書は、著者の博覧強記ぶりが遺憾なく発揮された著作といえよう。さらに著者は、『情報社会の〈哲学〉――グーグル・ビッグデータ・人工知能』（二〇一六）で最先端の情報技術へも分析を進めた後、本書『ヴァーチャル社会の〈哲学〉』（二〇一八）を公刊するに至った。

廣松哲学を自家薬籠中のものとしつつ、現代における情報社会の具体的な諸現象を緻密に解きほぐして分析していることに本書の特徴がある。一方で廣松哲学との違いも明確にされている。たとえば、廣松は「関係の第一次性」を打ち出し晩年に役割理論の構築に向かった。それに対して、著者は「関係」「役割」等を社会の構成要素とは捉えない。

著者が処女作『〈メディア〉の哲学』（二〇〇六）以来宣揚してきたのが、〈メディア〉史観である。〈メディア〉史観とは、マクルーハンの唱導によるもので、歴史と社会とメディア技術を三位一体的なものとして了解する。著者は〈メディア〉史観を〈存在＝認識〉論的な前提と捉える。ルーマン、マクルーハンに倣い「構造」の歴史的相対性を認める見方は、廣松哲学とも重なるところがある。しかし、廣松が歴史＝社会の次元にとどまったのに対して、著者はさらにメディアという次元を加え、廣松哲学を超える圏域へと歩みを進めている。さらに廣松以後の理論とも比較しており、本書は廣松哲学が普遍理論として持つ可能性を検証するという意義も有している。

また本書は、流行思想や通俗的な解釈（思弁的実在論、グレーバー、ライアン、ソシュールとパースの相違、等）に対しても厳しく誤りを指摘し、アカデミアや文壇事情、さらには現実政治についても警鐘を鳴らしている。流行自体をも考察の対象に据えているのだから当然といえば当然だが（第二章参照）、著者は流行しているというだけの理由で言説を肯定することはない。本書は、時流や雰囲気に流されない緊張感を持つ著作であるといえる。

著作のスタイルとして特筆すべきは、扱っている対象が同時代のものでありながら、依拠する理論的枠組みがクラシックであることだろう。著者が元来専門としてきた新カント派やドイツ観念論哲学はいうまでもなく、廣松が深入りしなかったフーコーやドゥルーズをも踏まえて論理が組み立てられている。本書のタイトル「ヴァーチャル」がドゥルーズの概念「潜在性」に由来を求めていることも象徴的である。ウェーバーにおける「官僚制」論の「物象性」に着目した点も、廣松とは別のアングルからウェーバーを解釈したものといえよう（近年、著者はウェーバー論も著している）。また、自身は経済学徒ではないと断りをいれているが、マルクスの『資本論』が本書全体の理論的参照軸になっていることが見て取れる。たとえば、第一章では流通過程、第二章では使用価値、第三章では貨幣論、第五章では労働現場への着目がなされるなど、参照は『資本論』全編にわたっている。

本書は著者が読者を引き上げていく構成（著者＝読者＝われわれ）を採っている。それゆえ、まずは叙述につき従って読み進め、読み終えた後に本書全体の意義を考えることが要請される。情報量や理論的な稠密さに圧倒されるところがあるが、論理の展開はリニアで追いやすい。多様な事象を各章で独立して扱いながらも、理論的な枠組みは一貫しており、章と章が相互に連動する系列となっている。著者は通読を求めるが、著者の構図をある程度理解していれば、各章をそれぞれ独立した章として読むことも可能だろう。

以下、各章の概略を要約し、私見を述べたい。

・第一章　アマゾン・ロジスティック革命と「物流」の終焉

情報社会においては「流通」の変容が生じており、中身のない「情報」が先にたち、事後的に商品の実質が充当される。本章では、「物」から「情報」へという世界観のパラダイムチェンジが説明される。情報社会成立以前には、「流通」は自己完結的な「物」の空間的移送・移動だった。在庫の保管や運輸が論じられた『資本論』第二巻の流通過程論は、情報社会成立以前の流通を対象としている。それに対して、情報社会では先に顧客の注文があり、それから生産が開始される。これは、オンライン上の商品カタログ（＝「情報」）から注文を受け、それから組み立てが始まる端末などを考えれば理解しやすい。「物」から「情報」へという転換は、廣松が唱えた「物」から「事」へ（「事的世界観」）を想起させる。著者はおそらく廣松の「事的世界観」を多分に意識しつつ、「情報」による「物」の構成を基軸とする〈情報的世界観〉へと情報社会が推移してきているものと捉える。もっとも、社会が「情報」のみで構成されることはなく、労働（価値の創造）が先にあることを著者は強調する。マルクス経済学の知見が活かされているところだが、たんにマルクス解釈の中で生産や流通を扱うのではなく、メディアという素材を定義することで、生産（垂直性）の重要性がいやましてきていることが説得的に示されている。メディアの歴史を辿るという意味ではなく、唯物史観を踏まえたうえで、メディアによる生産の前景化を強調する〈メディア史観〉を打ち立てている点に本書のオリジナリティがある。

また、情報社会における「移動」や「場所」の収縮ないし無化という現象が、作品の鑑賞や購買の域を超えて「労働」という「生産」現場にまで及んでいることがさりげなく示されている（五一頁）。そこで例示される「在宅勤務」が今般のコロナ禍で普及してきたことに鑑みれば、本書の理論的主張が現実を先んじて捉えていたことが分かる。

・第二章　「モード」の終焉と記号の変容

これまでは特権的な位置にあるマスメディアから情報が伝達される〈放・送〉体制が支配的だった。しかし、その構造は、情報社会の最新段階において解体し、平面的なネット・ワーク構造へと移り変わっている。本章は、こうした変遷を踏まえ、旧来の文化記号論

の限界を指摘した。さまざまな文化記号論には「記号とマスメディアとが〝共犯関係〟にある」という前提が自明視されていることを暴き立てたうえで、この構図自体が崩れている以上、文化記号論の有効性は失効していることが示されている。

本章の分析対象となるのは、資本主義を駆動するものとみられた「モード」である。そして、「モード」論に先鞭をつけた論者として著者が参照するのが、ヴェブレンとゾンバルトである。両者が「モード」を〝形式〟として捉えたことを踏まえ、「モード」が「本質的に逆説的な存在性格」を持つことを著者は浮かび上がらせる。たとえば、ヴェブレンによれば、個人が本能にしたがって行為した結果として「モード」が出現する一方で、「モード」は個人を集団的心性へと同化させるという。このように、個人と集団の循環的構造をつくるのが「モード」である。

「モード」の逆説的構造の解明に向かい、社会という次元で止揚したのがジンメルであると著者は位置づける。「変易」と「安定」といった対立項は、ジンメルにあってはむしろ相合して「社会構造を再生産的に維持・存続させるメカニズム、「同一性（大衆）と非同一性（個性）との同一性（モード）」を実現する「モードの弁証法（ディアレクティーク）」として肯定的に捉え返された」（七六頁）と著者はみる。ジンメルの著述を時代順ではなく内容にもとづいて再構成する手つきは、『〈メディア〉の哲学』（二〇〇六）でベンヤミンを扱った章でも見られ、思想史の方法論として学ぶところが多い。

ヴェブレン、ゾンバルト、ジンメルら三者の立場は、商品における質料／形相的契機の区別を前提としている。高度化した資本主義では、〈形相的なもの〉の評価への転換が起こる。その純化した形が「モード」である。「モード」の「新奇性」が無内容の〈価値〉を体現し、資本主義を駆動する。こうして二〇世紀後半に迎えるのが、「記号」の資本主義である。

文化記号論を代表する論者として取り上げられるのが、J・ボードリヤールとR・バルトである。バルトは、代表作『モードの体系』でモードが同語反復的（自己言及的）な「権力性」を持つことを告発する。「権力性」には内容はない。世の中で評価されているから自分も評価するといった類の考え方が、モードの「権力性」である。著者はH・ルフェーブルの〈日常性〉批判の系譜上にバルトを位置づけ、政治的な手法から距離を置き原理的な分析に徹した点にバルトの独創を見る。バルトの洞察は、「記号」と「価値」の問題は切り離せず、一体であるというものであった。

さらに著者は、マスメディアを権威とする〈放-送〉パラダイムから〈ネット-ワーク〉システムへと移り変わったことで、「価値」の創造と流通が行われなくなり価値が相対化されたことを指摘する。著者はマクルーハンの理論を援用し、〈放-送〉パラダイムにおいては、〝文化財（コンテンツ）〟が「作品性―〈著者＝権威〉性―商品性」という三重の性質を担う〈ホット〉なメディアであり、文化記号論もこの〈ホット〉な性質を前提としていると述べる。それに対して、〈ネット-ワーク〉パラダイムにおいては〈著者＝権威〉が消失し、ネット上を流通する〝文化財〟は「断片性-匿名性-無償性」とい

う三重の〈クール〉な性質を持つという。

文化記号論の枠組みでは、〈クール〉なネット〝文化財〟を解析することは不可能である。それゆえ、文化記号論の有効性が失われていることを著者は指摘する。さらに、ネット社会への移行は、模倣のメカニズムやコンテンツの受容にもいやおうなく変化をもたらした。すなわち、マスメディア以前には、上流階層の卓越した趣味を模倣するといった階層間の「垂直的模倣」（先「モード」）が主流であった。そしてマスメディア時代には、特権的立場から与えられる情報を大衆が受容し普及するという、垂直的契機と水平的契機が組み合わさった「円錐的模倣」（「モード」）へと移り変わったのである。その後、〈ネット-ワーク〉パラダイムにあっては、垂直的要素をまったく欠いた純然たる「水平的模倣」が優位となる。

権威の失墜はマスメディアにとどまらず、文芸分野における「文壇」の権威失墜も著しいと著者はいう。古典の乱読や文章修行が必要であった時代は過ぎ去り、文芸に関心のある「アノニマス」の「支持（＝ウケ）」のみが要求されているという事態を嘆き、「アカデミアに蔓延しないことを祈るのみ」（一〇八頁）であるという著者の見方は厳しい。

ネット上で起こっているのは、記号の〈表情＝情動〉的契機である「エモティコン」（顔文字などの表現）をもとに、〈コミュニケーション〉が連鎖的接続されていく事態である。意味の貧弱な「エモティコン」に人々が巻き込まれていく様を、著者は〝情動の共同体〟と名づけ、「ジャスミン革命」やトランプ政権を成立させた背景には、この〝情動の共同体〟があるという。私見では、世界が彩りをもった相貌として迫ってくることを表情性と名付けた廣松の表情論を著者は念頭に置いていると思われる。著者は「エモティコン」の意義に過大な期待を持ってはいない。しかし、差異化のみで価値が相対化されるなかで、「エモティコン」の持つ〈質料性〉や〈同一化〉機能は、〈価値〉を生成する可能性を秘めているともみている。

文化記号論の成り立ちを思想史的に明瞭にしつつ、それが無効となった情報社会を著者はこう一般化する。「情報社会とは、「情報」における「意味」の〈差異化〉機能を極大化させるとともに、差異化された「意味」を相対性の坩堝に投げ入れて、〈価値〉を平準化させる、すなわち無〈価値〉化させる社会である。」（一一六頁）

情報社会では価値が相対化されていき、オリジナルとコピーの本質的な区別も意味をなさない。作者の権威が失われることは、終章で述べられる〈書く〉人間の消失とも相即する主張である。しかし、その主張を押し進めると、学問的真理や有効性も相対化されてしまわないだろうか。情報社会の問題点を説得的に浮かび上がらせるための章とも読めるが、ややペシミスティックな印象が残る。もっとも、このような問いも、著者大黒氏による学問的営み（学としての哲学）のプロジェクトに収まるのかもしれない。

・第三章　ビットコインの社会哲学

日常的な感覚では、電子マネーとビットコインの異同に気を留め

ることは少ない。本章は、電子マネーとビットコインが似て非なるものであることを貨幣論的に分析し、両者が異なるパラダイムにあること、情報社会においてはビットコインがより根源的なものであることを指摘している。旧来の貨幣論を踏まえたうえでビットコインを分析し、論理パズルのような暗号論にも言及しているため、本章の叙述は理論的にも難解さが極まっている。しかし、ビットコインの登場により物象化論が依然として有効であることが明らかになったことを示すためには、必要な手続きであろう。また、暗号はビットコインを成り立たせる「地平」となっており、ビットコインには「仮想通貨」という通称よりも「暗号通貨」という呼び名こそふさわしいという。暗号技術への着目は、従来の貨幣論には見られなかった点である。

著者は、電子マネーの登場により貨幣の〈モノ〉性が閑却され、「情報」性＝〈コト〉性が顕になったという通説を批判する。この通説は、硬貨や紙幣などの貨幣には〈モノ〉性が備わっているが、電子マネーは形態上物質をもたないため〈モノ〉性が希薄になっているという考えに基づく。著者は貨幣の「物質」性と〈モノ〉性を注意深く腑分けすることで、電子マネーとデジタル貨幣の最新形態であるビットコインの違いを明らかにした。ビットコインは電子マネーと異なり、「情報」性＝〈コト〉性はもちろんのこと、「物質」性と〈モノ〉性を兼ね備えているという。著者は、〈モノ〉性を持たず「情報」のみで決済される電子マネーに対して批判的である。それでは、ビットコインはいかにして〈モノ〉性を有するのか。ビットコインは稀少財である「金」をモデルとしており、その獲得のために「プルーフ・オブ・ワーク」（Proof-of-Work, PoW）なる苦役を必要とする。ビットコインを獲得することは「採掘」（mining）と称される。著者は「採掘」に必要となる電力をマルクスの概念「抽象的人間労働」になぞらえて、〝抽象〟労働に相当するものと見なす。この立論はまさに目から鱗が落ちるものであるし、労働に価値創造の根源を見ようとする著者の意図が見て取れる。

電子マネーとビットコインの比較は、それぞれが持つ貨幣としての機能、置かれているパラダイム、人称性などの観点から行われる。マルクス経済学の概念「貨幣の四機能」（尺度、交換、蓄蔵、支払）に即して両貨幣を見れば、電子マネーは「支払い」の機能しか持たない。しかも、クナップ流の貨幣国定説の枠内にあり、補助的な貨幣にとどまっている。それに対して、ビットコインは原理的には「貨幣の四機能」を担いうるという。蓄蔵の機能を担い、投機の対象となっていることがビットコインの〈モノ〉性を証拠立ててもいる。そして、ビットコインに〈モノ〉性を付与するのが、暗号技術である。電子マネーにおいても暗号技術は用いられ、電子マネー使用者の「信用」と〈同一性〉は、〈発行機関〉や〈認証局〉によって証明される。それゆえ、電子マネーはヒエラルキカルな階層構造の埒内にあり、実在世界に存在する使用者の〈固有名〉に紐づけられている。それに対して、ビットコインの使用を裏づけているのは、ネット-ワーク上のノード（項）、すなわち「アドレス」である。ネットワーク空間のアドレス（ノード）というタームは、社会的諸関係の結節（マ

ルクス〉を踏まえたもので、以前の著作からすでに用いられている。「アドレス」は、インターネット上のドメイン名とは異なり、実在世界における人格的個人との対応関係はない。「アドレス」が示しているのは、匿名的で不定的な〈同一性〉にすぎない。匿名の所有者によって所有されるビットコインが現実世界につなぎとめられるのは、先に挙げた抽象労働たるPoWによる。というのも、PoWによって「信頼」が創造されるからである。「信用」と「信頼」を著者は厳格に区別し、ビットコインには「信頼」が不可欠であるという。ちなみに、本章の貨幣論で著者が参照軸としているのが、N・ルーマンの理論である。著者は『〈メディア〉の哲学』（二〇〇六）でメディア概念を最も広く深く考察した思想家としてルーマンに着目した。それ以来、「社会システム」の基本要素が「コミュニケーション」であるというルーマンの論を主たる参照軸とし、本章における「信頼」の考察にもルーマンの貨幣論が援用されている。

原初的共同体においては、慣れ親しんだ人々のあいだで貨幣が流通するため、「複雑性＝不確定性」は存在していない。しかし、〈（手書き）文字〉の発明により、共同体の規模が拡大すると、共同体から〈個人〉が析出されてくる。〈個人〉が内面をもった〈他者〉に対して行為するとき、〈他者〉との間のコミュニケーションは〝賭け〟の性格を帯びるという。この〝賭け〟こそルーマンの概念「人格信頼」であり、「社会」の機能的分化とともに「信頼」は非人称化・高次化・抽象化を遂げる。その結果生まれるのが、「システム信頼」である。「システム」とは〈コミュニケーション〉の連鎖的な接続にほかならず、「人格」とは異なる非人称的なものである。貨幣は「システム信頼」に支えられており、この時の「信頼」の対象となるのは中央銀行という〈権威〉である。つまり、「システム信頼」もヒエラルキカルな構造の範疇にある。

電子マネーで支払いが可能であるのは、当事者以外の第三者である中央銀行が取引を「監視」し貨幣使用者の「信頼」を担保しているためである。つまり、電子マネーにあっては、〈権威〉となる第三者が明確に存在する。それに対して、ビットコインの交換は二者関係の信頼ではなく、「不可視の第三者」（不在の他者）を含みこんだ「三者関係」から成り立っているという。ビットコインの交換が行われるとき、当事者以外のアノニマスなギャラリーが交換の場に立ち会うことを、著者は「監視」を読み替えて〈環-視〉（Um-Sicht）と名付ける。さらに著者は、ルーマンの「システム信頼」を換骨奪胎し、〈環-視〉に基づく「信頼」を「アノニム信頼」（Anonym-Vertrauen）として捉え返す。当事者以外のギャラリーがなぜ〈環-視〉の役割を引き受けるかということについては、ビットコイン設計者Satoshi Nakamotoの示した解が紹介される。その解が先に挙げた「プルーフ・オブ・ワーク」である。「プルーフ・オブ・ワーク」は、Nakamotoの意図を超えて、三重の役割を果たしていると著者は鋭く指摘する。まず、取引の「場」に立ち会うには、CPUパワー（電力）を要する課題を解くという「競争」に勝ち抜く必要がある。「競争」に勝ったビットコイン所有者は、取引を〈環-視〉することで報酬としてビットコインを得る。このよう

に、ビットコイン所有者の「欲望」が「誠実」へと転換され、発行量も増大されるという仕組みである。これは評者による切り詰めたパラフレーズにすぎないが、ビットコインはかくして「プルーフ・オブ・ワーク」（抽象労働）を介して〈モノ〉性を強化される。ビットコインに対する著者の理論的考察は、大略このようなものである。

評者はビットコインについて無知であるが、「三者関係」を交換の前提とする本書の主張に理論的に近いものであるという印象を持った。これは、評者が自著（『廣松渉の思想――内在のダイナミズム――』二〇一八）で商品交換を論じた際に、二者関係ではなく、社会関係が折り返された三者関係によって商品交換が行われるという立場を採ったためであると思われる。著者の交換理論が廣松哲学に依拠するものであるかについては、予示されている著者の廣松論を待ちたいと思う。

評者にとって示唆に富んでいたのは、ビットコインの機能が設計者である Satoshi Nakamoto の思想に裏打ちされていることである。Nakamoto は無政府主義的な思想の系譜上にあり、中央銀行のような集権的な〈権威〉を否定し、新たな「信頼」を創造することを企図している。フラットな構造の中にあるビットコインとて、「価値」を創出するには、垂直的な階層性を必要とする。著者の課題意識はまさにここにあるといえよう。

さらに著者は、ビットコインを思想史的な検討の俎上に載せる。いわく、ビットコインは第二次世界大戦時の〈領域〉統治を基本原理とする「グローバリゼーション」に適合的なのではなく、「世界社会」（ルーマン）に適合的な通貨であるという。先に触れたように、電子マネーとビットコインの相違は人称性にあった。貨幣のやりとりをめぐる人称性の問題がマクロレベルの国家の問題へと展開されて本章は締めくくられる。中国では、ビットコインが締め出され、経済行動の主体の固有名が国家に筒抜けとなるモバイル決済が推進されている。著者によれば、これは国家が経済を政治的に包摂する「顕名経済」（国家）であり、「匿名経済」（社会）とのせめぎあいが予想されるという。ビットコインの貨幣論的分析にとどまらず、思想的に持っている先端性を明らかにしているのが本章の独創であろう。今後ビットコインの思想性がどのような形で現れてくるのかを見つめていきたいところである。

・第四章　情報社会の〈こころ〉

本章は、「コミュ障」が器質的な「病態」として捉えられがちである趨勢に異を唱え、それを成り立たせている機制を明らかにしている。著者は「コミュ障」を、精神医学分野で用いられる DSM-5 の「社会性コミュニケーション障害」の一種としてではなく、ネットスラングとして捉える。「コミュ障」自体の分析ではなく、「コミュ障」が問題視される事態の存立そのことの分析が本章の主眼である。

まずは、「コミュ障」と「引き籠もり」の異同と連続的な推移関係をアレゴリカルに示すものとして新海誠の諸作品が取り上げられる。それにより示される著者の見方は、「コミュ障」は「引き籠もり」

が社会へと引き摺り出されたことにより現われた「社会的兆候」であるというものである。つまり、著者の捉える「コミュ障」とは、社会から〈外部〉が消失していることの証左として刻印されるスティグマなのである。

本章は現代の情報社会の分析にとどまらず、一九六〇〜七〇年代における地理的・空間的な領域としての〈社会〉、そして一九八〇〜九〇年代における〈大衆〉社会へと至る、〈社会〉の歴史的変遷を見ている。取り上げられる社会現象は、情報社会という視角に限られず、戦後思想史を扱ったものとしても読むことができるのではないだろうか。なお八〇年代の大衆論については、大黒岳彦『「情報社会」とは何か？――〈メディア〉論への前哨』（二〇一〇）の第三章「二重化された社会」に詳しい。前章では、現代における〈国家〉と〈社会〉の角逐の行く末がいかなるものかが提起されたが、本章の対象は〈社会〉であるため「国家」は意図的に考察の範囲から外されている。戦前・戦中・戦後直後の一九五〇年代までは「国家」のプレゼンスが高かったことが示されるのも、本書の抜け目のない点である。

本章の主たる主張は、〈社会の外部〉が情報社会の進展に伴って消失したということにある。〈社会の外部〉が存在していた最後の時期である八〇〜九〇年代には、なおも二つの仕方で存在したという。一つは、サイバースペースを以って〈社会〉の疑似空間的な〝外部〟を作るという方法。二つ目は、〈社会〉の〈内部〉に情緒的に凝集性の高い繋がりを創出することで〈内部〉に〈外部〉を孕ませるという戦略である。後者の例として挙げられるアングラ劇団や新宗教は吉本隆明の〈共同幻想〉に対応する。

また、〈社会〉の〈内部〉に穿たれた〈外部〉として著者が繰り返し挙げるのが「純粋相互行為」である。これは、一九六〇年代から一貫して見られ、吉本の概念〈対幻想〉に対応する。〈社会の外部〉として〈共同幻想〉（疑似共同体）と〈対幻想〉（純粋相互行為）があるわけだが、〝種〟を異にするものとして著者は両者を厳格に区別する。そのうえで、一九七〇年代の連合赤軍内部で起きたリンチ虐殺事件を、〈共同幻想〉が〈対幻想〉を抑圧した例として取り上げ、その後インターネットの普及とともに〈共同幻想〉も消え去っていったとみなす。

著者による吉本〈幻想〉論の扱いは注意深い。吉本は「国家」存立の原理的メカニズムを暴き出すことを目的として〈自己幻想〉、〈対幻想〉、〈共同幻想〉のトリアーデを概念化した。現代の情報社会においては、〈社会〉が前景化したことで「国家」のリアリティが相対化されつつあるため、著者と吉本の課題意識は畢竟異なるものとなる。しかし、それでいてなお、著者は吉本の立論の意義を認める。

著者は、情報社会の進展とともに、あらゆる〈幻想〉が〈社会幻想〉へと一元化されるとみなす。〈社会幻想〉が情報社会における〈こころ〉の形にほかならず、滞りないコミュニケーションを要求する社会的規範として、個人を抑圧するのである。このように〈物象化〉されてはたらく抑圧的〈規範〉を、著者は批判的に捉える。内在的〝超越性〟を持つものとして〈幻想〉を規定する著者は、〈幻想〉に

閉塞した社会の突破口を見い出そうとしているのだろうか。

さらに、ハーバーマス、ルーマン、ゴフマン、吉本を対比するという斬新な視角から、吉本の〈こころ〉把握がすぐれている点を剔抉し、廣松へも接続させている。ハーバーマスの「合意」が虚構的要請にすぎないのに対して、〈愛〉というメディアを用いて〈親密システム〉を体系に導入したルーマンの卓見を著者は買う。さらに、ルーマンの〈こころ〉把握が「個体主義」的であるのに対して、著者は〈大衆の原像〉に固執した吉本に沿って、情報社会の〈こころ〉は「個体超出的な存立体」であると捉える。「〈こころ〉は恒に〈幻想〉と〝こころ〟の二肢的二重性においてある。〈こころ〉という領域では、「関係の絶対性」（吉本隆明）あるいは「関係の第一次性」（廣松渉）が支配していると言ってもよい。つまり〈こころ〉とはつねに〈個体的意識〉（etwas Mehr, etwas Anderes）であり、不可避的に〈幻想〉という〝剰余価値（メアヴェアト）〟（Mehrwert）を孕みながら成立している。」（一九九頁）吉本の共同幻想、関係の絶対性と廣松の共同主観性論、関係の第一次性。これらの概念がどのように交差するかという問題は、従来、連想的に議論されてきた。著者は両者の概念を、たんに比較したり、いずれかの概念に凭れ掛かるのではなく、情報社会の歴史的変遷に即して捉え返している。吉本と廣松というなされるべき比較は、情報社会における〈こころ〉という視角から検討するからこそ可能になっていると思われる。要望を挙げるとすれば、上記の引用は、〈こころ〉の「個体超出」性に着目した箇所であるため、吉本と廣松の概念の踏み込んだ突き合わせはされていない。「関係の絶対性」と「関係の第一次性」が機能的に等価なものであることについては、予示されている廣松論で扱われることを望みたい。

ルーマン、ハーバーマス、ゴフマンの相互行為概念を互いに〝射影〟するという巧みな方法によって、著者は各々の概念を比較している。そして、情報社会の現状としては、ルーマン＝ゴフマンの「相互行為」把握が有効であり、三者関係が「相互行為」の規準的地平を構成しているという。相互行為を二者関係ではなく、不在の他者を〈場〉に導入する三者関係で定式化する理論的枠組みは、ビットコインの分析にも見られたもので、ここではゴフマンに着目した慧眼が際立っている。ところで、「プライヴァシーという〝闇〟のない〝透明〟な〈社会〉」（二〇四頁）というハーバーマスの理論に適合する世界が現在の情報社会において出来していることに対して、ハーバーマスを批判的に捉える著者はどのように考えているのだろうか。

・第五章　身体データとコントロール社会

本章では、情報社会における監視の在り方が考察される。まず検討されるのが監視社会論に先鞭をつけたと目されるD・ライアンの分析だが、彼は国家の観点を無造作に混入させており、参照軸としているフーコーから思想的に退却しているという。多作であるものの重複が多く、監視社会論も実質的に『監視社会』（二〇〇一）に集約されていると著者のライアン評価は辛い。著者はライアンを引

き合いに出しつつ、むしろフーコーとドゥルーズに沿って論を組み立てている。また、従来使われてきたドゥルーズの「管理社会」という訳語が誤訳に近いとして「コントロール社会」という訳語を提唱するなど、踏み込んだ解釈も見られる。さらに、フーコーに焦点を合わせ、フーコーが問題系を〈権力〉から〈統治〉へと展開していったのは、〈権力〉論では「国家」をモデルとした他律的原理を拭い去れず、社会の「自己言及的な構造を掬い取れない」ことに気づいたためであると論じる。

著者が創出した概念〈看‐視〉には、フーコーの自己統治論を引き継ぐ意図がある。そしてさらに、フーコーや生物学をもとにした「ソーマ的自己」（自己による自己への「気遣い」）を情報社会における「主体」的個体として措定する。「ソーマ的自己」が〝データ束〟であるという捉え方は、廣松渉が人間存在を役割関係の束であると見なした人間観を引き継ぐものであると忖度される。しかし、「ソーマ的自己」すらも結局は、〈看‐視〉（Rück-Sicht）、〈還‐視〉（Retro-Sicht）、〈環‐視〉（Um-Sicht）の三つによる「データ監視」によって、〈社会〉へと従属することになる。ヒエラルキカルな構造の中で国家や権力から天下り的に命令され従属することと、二次元的・平面的なネットワークに置かれながらも自ら主体的に〈幻想〉へと従属していくことを比べたとき、はたしてどちらが望ましいことなのだろうか。これについて、著者は倫理的評価を下さないことを明言する。かつて廣松渉は、『存在と意味』第二巻の末尾で最上位の価値に正義を据え物議をかもした。著者は廣松正議論をめぐる論争を踏まえ、廣松の問いの立て方を周到に避けているように思われる。

情報社会における「主体」が「個人」から〈社会〉へとその座を譲り渡しつつあることを著者は指摘する。しかし一方で、第三章で〈社会〉と「国家」のせめぎあいが起こっていることを中国の独裁的な国家体制を引き合いに出しつつ論じてもいる。〈社会〉に従属せざるを得ないという現状を著者は批判的に捉えているが、翻って「国家」へと自覚的に従属する趨勢がふたたび生じたときに、それを批判するだけの主張を出せるかという問題が残されるように思う。

・第六章　ＶＲ革命とリアリティの〈展相〉

本章で分析の対象とされているＶＲとは、ヴァーチャル・リアリティの略称である。通説では、二〇一六年にＶＲ元年を迎えた後、３Ｄテレビの不振を経て、二〇一八年には変調したとみられている。それに対して、著者はＶＲが終焉したとは考えず、ＶＲ革命はＩＴ革命に比すべき構造変動であり、そのダイナミズムを対自化することを課題に掲げる。VR(Virtual-Reality) から MR(Mixed-Reality) への推転を、Ｅ・ラスクの二世界説（現実世界／仮想世界）に適合する存在了解からラスクの「二要素説」、ルーマンの〈メディア／形式〉に適合する存在了解への転換と捉える見方は、著者の理論的枠組みに基づいている。

本書においてＶＲは、技術、社会、思想の三つの次元で考察される。著者は、光景への「没入」から光景にはたらきかける「相互作

用」へ、さらには両者が組み合わされた〈存在＝現前〉へと至る技術を系譜学的に捉えなおす。そのうえで、「感覚像」の〈存在＝現前〉から「人工的環境」の〈実在性〉を首尾一貫的に矛盾なく構成し、安定的に維持することが、VRにとっての課題であると見なす。

社会的次元の考察においては、社会性VRにおけるリアリティの源泉が〈コミュニケーション〉の連鎖的持続にあると著者は捉える。情報社会においては、〈コミュニケーション〉の連鎖的持続からなるシステムこそが第一次的であり、コミュニケーションが人格に先立つことがヴァーチャルYouTuber等の例で示されている。本書において役割に重きを置かず非人称性を重視しているように見受けられるのは、情報社会における役割行為にはもはや直接対面が必須ではなく、相手が見えなくともコミュニケーションが成り立つことの裏面ともいえよう。

現象学的社会学の創始者A・シュッツ、ベイトソンを継承する論者としてゴフマンを援用している点は瞠目すべきであろう。社会唯名論的なシンボリック相互作用論やエスノメソドロジーにゴフマンを位置づける通説を著者はしりぞけ、社会実在論的な系譜につらなるデュルケミアンであるという思想史研究を買う。さらに、ゴフマンが構造主義者とも言われる所以をゴフマンの『フレーム分析』とルーマン理論との突き合わせから明らかにしている。ゴフマンが「演劇」をモデルとして「相互行為」を把握していることと、社会VRにおいては〈私〉と〈汝〉ではなく〈私〉と〈モノ〉の関係から「相互作用」が生じるということは、一見すると齟齬をきたすようにも思える。しかし、ゴフマンの課題設定自体が超越論的であり〈汝〉が事後的に構成されるということを踏まえると、そのような疑問も解消されよう。著者によれば、ゴフマンはルーマンに先駆けて、情報社会の分析に有効な「相互行為」理解を示していた。著者の論に即せば、直接対面か否かは二次的な問題であり、〈コミュニケーション〉システムの構造こそが一次的なのである。

円錐型モデルの情報社会では、事実がマスメディアの権威によって価値付けられ、取捨選択されてきた。二次元的で平面的なネット-ワークが優位となった現在の情報社会においては、諸事実すらも相対化される。そして、現在日々生み出され氾濫している没価値的な情報が、「ビッグデータ」にほかならない。著者は前著『情報社会の〈哲学〉――グーグル・ビッグデータ・人工知能』（二〇一六）でも、「ビッグデータ」が塵芥にすぎないことを強調しており、本書でもその問題意識が継続しているといえる。

平面的なネットワーク上の「ノード」（社会的関係の「項」）からSNS等で情報が発せられる在り方を著者は微小〝放-送〟と呼び、情報が波紋状の〝無数の高原〟をつくると捉える。この見方に対しては、もはや発信しているのが誰なのかも分からないほど錯綜した情報の洪水は一体どこに行き着くのかという疑問が残る。このような社会に生きる私たちは、相対化されている価値にどのように向き合うべきか。外部から強圧的に与えられる情報を一度遮断し自省することで、社会に呑み込まれず、実質のある価値を生み出すことに期待をかけるほかないのではないだろうか。

思想的次元の分析では、ヴァーチャリティが定義される。アリストテレスの「潜勢態‐現実態」に遡ったうえで、〈潜在性〉として「ヴァーチャリティ」を解する論者としてベルクソン、ドゥルーズを、さらに人類の歴史過程全体がヴァーチャル化の歴史であるというピエール・レヴィの論を著者は参照する。力技という印象もあるが、情報社会を「潜在社会」と捉える著者のヴィジョンがもっとも熱量を帯びた筆致で描かれる箇所であろう。著者によれば、情報社会の〈社会的現実〉は、〈潜在的〉なものと〈顕在的〉なものとの階層的な混成態であり、あらゆる存在をメディア化＝潜在化する社会である。ちなみに著者は、『〈メディア〉の哲学』第二部でF・キットラーが影響を受けた哲学者としてデリダを挙げ、ルーマンとの類似性を検討している。著者はデリダの脱構築や散種といった概念を「コンテクスト」の特権性を相対化するものとして解し、可能的なものや潜在的なものといった「意味」生成の領野を切り拓いた点に、デリダの理論的達成をみている。潜在性への着目は、『〈メディア〉の哲学』に端緒があり、本書『ヴァーチャル社会の〈哲学〉』において全面展開されるに至ったとみることができよう。

「潜在社会」にあって、われわれはいかなる社会を構想すべきか。あるいは、「潜在社会」の中で価値を創出する途を選ぶべきか。「潜在社会」に内在しつつ、それを総体として捉える視点に立つという困難な問いに著者は挑んでいるといえよう。

・終章　〈文書〉の存在論と〈ポストトゥルース〉問題

本章冒頭で、安倍政権下で明るみに出た「文書」をめぐる不祥事を著者は例に出す。森友学園や加計学園らに法規範的・倫理的な問題があったことは言うまでもない。しかし、それを引き起こした情報社会総体の社会構造を分析するのが著者の手法である。構造分析のための参照軸となっているのが、F・キットラーの理論〈書き込みシステム〉である。キットラーは、著者が『メディアの哲学』でメディア論の歴史を通覧した際にも参照している構造的メディア理論学者であり、二〇二一年にその大著 *Aufschreibesystem 1800·1900* が翻訳された（大宮勘一郎、石田雄一訳『書き取りシステム 1800・1900』インスクリプト、二〇二一）。

著者は語源学的な考察からはじめ、〈文書〉概念の核はラテン語に起源を持つ「教える」「証明する」という〈機能〉にあると定義づける。そして、〈文書〉の機能分析のために、著者が導入するのが〈文書〉世界と「実在世界」という二元論である。これは、新カント派E・ラスクの〈二世界説〉をもとにしたもので、著者は〈文書〉世界と「実在世界」の関係の仕方に応じて〈文書〉を三種類に分類する。さらに著者は、〈文書〉の実在に内包される力を〈強度〉Stärke、〈文書〉が組み込まれる構造からもたらされる力を〈威力〉Macht と区分する。この見方は、〈文書〉を物象化論的に捉えるものであり、類を見ない。

〈文書〉の一つ目の在り方が、「公文書」などの行政的〈文書〉である。

行政的〈文書〉は、官僚組織などの「組織」という「実在」に関係するもので、その〝力〟は組織の成員に対して規範的〈威力〉として機能する。日常的な文脈では、「官僚制」や「文書主義」を批判的に捉える傾向がある。しかし、官僚制においては人間が没個性化してしまうといった紋切り型の官僚制批判を著者は採らない。むしろウェーバーによる「官僚制」論の先駆性を引き合いに出し、文書作成の〈手続き〉が連鎖的に接続するシステムとして官僚制を捉え返す。また、ウェーバーの用語「隷従の鉄鑑」をヒューマニズムや決断主義の線で読み込む疎外論的な解釈を周到に避けている。これには、廣松物象化論の影響があるのではないか。疎外論への対抗意識から物象化論を唱えた廣松渉は現象学的社会学の祖A・シュッツとの関係以外ではウェーバーに踏み込んだ考察をしなかった。このことを想起すれば、情報社会の分析から逆照射することによりウェーバーの意義を強調している点に、廣松と著者の違いがあろう。

二つ目の在り方が、報道的〈文書〉である。これは、関係する「実在」が組織を超えて「世界」大にまで拡張された〈文書〉であり、ドキュメンタリーの嚆矢であるフラハティやグリアスンなどの映像作家にまで遡ることができる。報道的〈文書〉の編制原理は「並列的配置」でありつつも、播布されることでマスメディアを頂点として大衆を底辺とするヒエラルキー構造が残されることとなる。

報道的な文体が非人称的でありながら力を持ちうるのは出来事やテーマの現代性ゆえであるという論理は、巷に言われる「現代的」とは何であるかを再考する契機にもなる。たとえば、未開社会が中央集権的な権力を持たず、「柔軟な切片性」を有するというドゥルーズの論を想起されたい。柔軟な切片性とは、未開社会の残滓などではなく、「完璧な現代性」を備えた機能なのである。同時代に起こっているから現代的であるなどという考えは、表層で起こっていることをめぐって騒ぎ立てているにすぎない。深層を揺さぶる逃走線をみるべきなのだ。

三つ目が歴史的〈文書〉である。〈文書〉の関係する「実在世界」が時間的な過去に拡張されて、もはや存在しない〝実在〟となる場合、歴史的〈文書〉となる。非現用の行政的〈文書〉も、「歴史的重要性」に応じて廃棄されるか保存されるかが決定される。それを認められ「国立公文書館」等への保存が決定されると、歴史的〈文書〉となる。歴史的〈文書〉とはたんに過去の痕跡を残すものではなく、時系列的な構造物に組み込まれることで「歴史的重要性」すなわち〈威力〉を持つというのが、著者の定義である。ちなみに、〈文書〉とは所謂「書き物」に限られず、「歴史的重要性」を認定されたものであれば、考古学的な物財も〈文書〉と見なしうる。「発端」、「展開」、「結末」という構文論的なプロットを持つ「物語」に組み込まれることで、〈文書〉は歴史的〈文書〉となる。著者は歴史の物語論をめぐるA・C・ダントとヘイドン・ホワイトの相違を踏まえつつ、「国史」編纂を担ってきた「国家」とそれに対抗する史観を打ち出してきたアカデミアも、ひとしくヒエラルキー構造を持つという。廣松『存在と意味』の叙述を援用していえば、「歴史記述」においても、構造の単一性とタイプの複数性がみられるということ

であろう。

言語論的転回以後の歴史哲学を踏まえたうえで文書を捉える見方は、歴史学の分野では実証主義批判として見られるものだが、新カント派や物象化論を援用している点に、本章のオリジナリティがある。

さらに著者は、F・キットラーの「書き込みシステム」を〈文書〉世界の構造分析に援用する。「書き込みシステム」とは、「書くこと」が個人の主体的な行為ではなく、非人称的なオペレーションとなったシステムを意味する。キットラーの分析は、「官僚制国家」を目指し国民国家完成期にあった一九世紀ドイツの〈書き込みシステム〉にはじまり、二〇世紀の高踏文学や大衆文学に至る。

キットラーによれば、一八〇〇年の書き取りシステムの総体を方向づけているのは、読み聞かせによって読み書きを子供に教える役割を担っていた母親である（大宮勘一郎、石田雄一訳『書き取りシステム 1800・1900』インスクリプト、二〇二一、一〇六〜一〇七頁）。一方で、書くことを役割として担うのが官僚であり、当時のドイツでは男性に限られていた。キットラーの行論に即せば、一八〇〇年の書き取りシステムにおいては、小説の消費者である女性は読書中毒に陥りがちであり、一方で男性は公文書を書くために古典の反復読書を行うという。キットラーによる対比的な構図は、今日的には波瀾を呼ぶものとも思われる。

さらに、〈文書〉の生成、流通、蓄積、保存といったプロセスが官僚化によって自動化された〈文書〉世界においては、人間が占める場所はなく、人間は完全に〈自立＝自律〉的な〈書き込み〉〝機械〟と化す。そこで著者が引き受けようとしているのが、キットラー以後の〈書き込みシステム 2000〉の原理である。著者は全訳（『書き取りシステム 1800・1900』）の刊行前からキットラー理論を自家薬籠中のものとしており、〈書き込みシステム 2000〉とは、キットラー理論を援用した著者独自のものである。ネットワーク・メディアのパラダイムに置かれた〈書き込みシステム 2000〉は、〈強度〉も〈威力〉も持たない〈ビッグデータ〉が跋扈する世界であり、人間ばかりか〈文書〉も〈書き込みシステム〉から締め出されていく。

昨今、労務時間の統計的改竄が行われたことが報道された。これは、「文書」の捏造という意味だけではなく、規則正しく文書を取り扱う「文書主義」すらも成り立たなくなっているという本書の主張を裏づけている。著者は、紋切り型の官僚制批判、国家批判よりも、現状起こりつつある書き込みシステムからの人間の完全な締め出しに危機感をあらわにしているのである。

最後に若干のコメントを添えておきたい。一つは、直接対面が減り「コミュニケーション」の在り方がさらに変容しつつある現状に関することであり、もう一つは著者の理論構築の場が今後どこに向かうのかという点である。

著者は、『〈メディア〉の哲学』終章でルーマン理論を内側から突破し、新たな理論構築を進めることを企てた。そのなかで、「反照的知覚」や「知覚の知覚」にルーマン理論の最深部を見出しつつも、

身体性への「眼差し」が欠落している点を見とがめる。著者は、前言語、言語以前的な原初的メディアとして身体メディアに着目しており、身体性を軽んじているわけではないことが見て取れる。著者の「コミュニケーション」論において根源的なものは、世界全体が帯びる「相貌」や「彩り」といった〝表情〟に定位する「相貌的世界」であった。

著者の身体論を辿れば、ライアン監視論への批判をもとに組み立てられた本書『ヴァーチャル社会の〈哲学〉』第五章が注目されよう。ライアンが「ありのままの身体」を直接的な「対面」を行う身体と規定するのに反して、著者は「データとしての身体」こそが「ありのままの身体」であると主張する。さらに、顔、歩容、位置といった身体データを、データというよりも「意味」であり、〝表情〟を持つものであると捉える。この章で身体データの分析を著者が意図的に控えるのは、〝表情〟がなくとも「コミュニケーション」が成り立つことを意味していようか。ここに来て著者の〝表情〟論は、後景にしりぞいているように思われる。『〈メディア〉の哲学』から『ヴァーチャル社会の哲学』に至る〝表情〟論の変容は、著者自身の理論的進展なのだろうか。

著者の見方では、情報社会においては「コミュニケーション」の連続性が一次的であり、人称性は二次的なものとされる。〈我〉と〈汝〉が相対する直接対面でなくとも、顔の見えない〈モノ〉と〈我〉との関係から事後的に〈汝〉が析出されるという主張は、「顔」や「表情」などの身体性を後景にしりぞけることにならないだろうか。著者の論に即せば、可視的な身体の様態である「顔」がなくとも、「コミュニケーション」システムは持続する。直接対面の回避を強いられている現状においても「コミュニケーション」は成立するという主張は、情報社会における価値相対化を強めるのではないか。

情報社会の急速な展開に伴い、著者の身体論も当初予期されたものとは別様の展開を見せているように思われる。

著者の立論が、廣松の表情論に着想を得たものであることは言を俟たない。本書において考察を保留された表情論は、著者の廣松論においてさらに展開されるだろう。

次に二つ目の理論構築の場についてである。著者は『〈メディア〉の哲学』でも、既存のメディア研究を業界研究と揶揄し、メディア論の通説をセントラル・ドグマと批判してきた。セントラル・ドグマとは、「情報」を「送信者」から「受信者」へと伝達する「手段」とみる「小包の比喩」やメディアと技術を等置する「メディア＝テクノロジー観」である。通説への批判を可能にしているのは、アカデミアとジャーナリズムを往還してきた著者の来歴にもよるだろう。経験や実体験があれば学問的な深みを増すとは必ずしも言えないとしても、ディレクター経験やルーマンの体系を潜りぬけたことが、著者のメディア哲学を唯一無二のものとしていると拝察される。〈放-送〉パラダイムから〈ネット-ワーク〉パラダイムへ構造変動が起こっているという見方を、著者は『〈メディア〉の哲学』以来堅持してきた。ヒエラルキカルな構造にあっては、よかれあしかれ〈権威〉が価値を付与してきたが、平面的な〈ネット-ワーク〉

においては価値が相対化される。かつてアカデミアとジャーナリズムの双方が有していたヒエラルキカルな構造も、現在は崩れつつある。アカデミアとジャーナリズムの世界を知り、双方を横断的に撃つ姿勢を見せる著者は、どこに価値を創造する場を見出しているのだろうか。

現在、超越的なものが消失し平面的なネットワークが優勢となっている。こうした状況下で〈次なる真理〉という価値をいかにして確立するか。これは廣松渉『存在と意味』の真理論や正義論にも関わり、評者にとっても課題となる問いである。城砦ともいうべき堅固なメディア哲学体系を築いてきた著者は、情報社会における新たな価値をどのように概念化するのか。気宇壮大な著者の企ては、さらに続く。

わたなべ・やすひこ（思想史）